＜ふくしまの10年・科学者　未来への伝言＞
（1）教訓「数世紀は伝える」

東京新聞 2021 年 3 月 16 日 配信

「原発悔恨・伝言の碑」を除幕する安斎育郎さん（右）＝11日、福島県楢葉町の宝鏡寺で

東日本大震災から 10 年の 11 日午後、楢葉町の宝鏡寺で真新しい碑が人々に披露された。「電力企業と国家の傲岸に立ち向かって40年、力及ばず」で始まる「原発悔恨・伝言の碑」。放射線防護学が専門で立命館大名誉教授の安斎育郎さん（80）と同寺住職の早川篤雄さん（81）が建てた。 仕事も違い、住所も離れた二人を結び付けたのは原発だった。 1973 年、東京電力福島第二原発（楢葉町、富岡町）の建設反対運動で知り合った。

碑文を書いたのは安斎さん。「反対したが、防げなかった。こんな大事故を起こしてしまったことの悔恨がある。この教訓を少なくとも数世紀は伝えたい」という。 安斎さんは東京生まれだが、戦時中の 1944 年から4年間、福島県二本松市に縁故疎開していた。福島は第二の故郷でもある。

2011 年 4 月、71 歳の誕生日に早川住職が運転する車で、いわき市から浪江町まで放射線量の調査をした。毎時 100 マイクロシーベルトという高線量の場所もあった。人の姿が見えない一方、桜や菜の花、コブシはきれいに咲いていた。「子どもの時に見た風景と同じ。懐かしさを感じた」という。

碑には「故郷の過去・現在・未来を奪った。」と記した。 安斎さんは原発事故で「専門家、科学に対する信頼が薄れた」と考えている。 科学の信が問われたことが過去にもある。鹿児島県の桜島で起きた大正噴火（1914 年）。 桜島の村役場からの問い合わせに鹿児島測候所が「噴火無し」と答えたため、一部の人々が逃げ遅れる事態となり、犠牲者が出た。桜島には「科学不信の碑」と呼ばれる碑が立っている。

（署名記者・初代福島特別支局長）

＜ふくしまの10年・科学者　未来への伝言＞
(2)最悪想定し最善尽くせ

東京新聞 2021 年 3 月 17 日 配信

国際平和博物館運動や被災者支援活動が評価され、ユネスコ・クラブから「地球市民賞」を贈られた＝2月26日、立命館大国際平和ミュージアムで（安斎さん提供）

楢葉町の宝鏡寺に「原発悔恨・伝言の碑」を建てた安斎育郎立命館大名誉教授（80）は、15 人しかいない東京大学原子力工学科の一期生。「原子力が利用できるかどうかは、安全に制御できるかどうかにかかっている」と考えて放射線防護学を専攻した。博士論文は、外部被ばく、内部被ばくの線量評価がテーマだった。

工学博士だが 1969 年に東大医学部助手に採用された。所属は放射線健康管理学教室。研究を進める中で、原発建設予定地の住民と語り合う機会が多く、原発開発の是非に思いを巡らせるようになったという。

32 歳の時に日本学術会議の原発問題シンポジウムで基調講演をし、原発の「6 項目の点検基準」を提案した。経済開発優先主義の否定、住民と労働者の安全の実証的保障などを挙げた。その後の原発批判のよりどころにもなった。

「東大原子力工学科一期生として、原発を進める高級技術者となるべきなのに、国家の期待に反した」と警戒されるようになった。「いい人だった」主任教授は、教室員に安斎さんと話さないように指示し、授業からも外された。東京電力の医師が研究室に加わり、安斎さんの隣に座って監視した。1986 年、東大助手から立命館大教授に移った。週刊誌に「『ガラスの檻（おり）』に幽閉17年」という記事が出たこともある。

立命館大では平和学も教え、国際平和ミュージアム館長も務めた。定年の日の直前、東日本大震災が起きた。 原発事故が起き、安斎さんはマスコミに「原発を推進してきた人に伝えたいことは」と問われて「隠すな。ウソつくな。過小評価するな。そして最悪を想定して最善を尽くせ」と答えた。的確だったが、生かされたとはいえない。

＜ふくしまの10年・科学者　未来への伝言＞
(3)住民の声を聞き現場へ

東京新聞 2021 年 3 月 18 日 配信

放射線防護学が専門の安斎育郎さん（80）は原発事故後、「福島プロジェクト」を組織し、京都から福島県に通っている。11 日に楢葉町の宝鏡寺であった「原発悔恨・伝言の碑」除幕式は 76 回目だった。 安斎さんのやり方はわかりやすい。まず、困っていること、不安なことを聞く。そして、現場に行って計測し、対処法を一緒に考える。 それは 2011 年 5 月 8 日に始まった。保育園関係者の勉強会で講演した後、声をかけられた福島市のさくら保育園に行った。園庭の放射線量を測ると、一時間あたり 6 マイクロシーベルト

もあった。日本の平均よりも 100 倍以上高い。 安斎さんは園庭の土を掘って放射線量を測るという作業を繰り返し、測定結果をグラフにした。表土を広く削るほど線量は下がった。保育園の人たちは対策できるということを実感した。園は県や市に除染をお願いした。翌年には園庭で運動会を開くことができた。その後、保育園、幼稚園などを 30 ぐらい調査した。 一緒に碑を建てた楢葉町の宝鏡寺の早川篤雄住職などの紹介で、仮設住宅に避難した人々の相談に乗った。自宅まで一緒に行って計測し、放射線量を下げるためにできることをやってみせてきた。 相談者は、偉い大学の先生で、70 代の安斎さんが力仕事をするので恐縮する。やがて親しくなる。 プロジェクトの仲間は 10 人近い。桂川秀嗣・東邦大名誉教授(79)は同世代で、毎回、一緒に行く。 放射線防護学の専門家は国内に 1,000 人以上いるが、住民に寄り添う研究者に出会うことは少ない。「名誉教授はお金ももらっていないし、論文を書く義務もないから」。安斎さんは冗談っぽく話した。

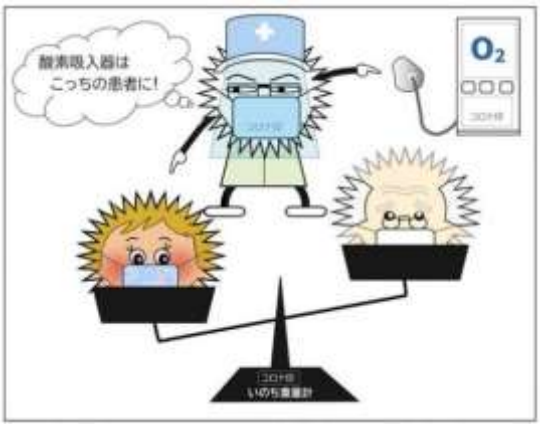
福島県三春町で畑の土を採取する安斎育郎さん＝安斎さん提供

＜ふくしまの10年・科学者　未来への伝言＞
(4)マンガもオカルトも

東京新聞 2021 年 3 月 19 日 配信

福島県楢葉町の宝鏡寺に早川篤雄住職(81)と一緒に「原発悔恨・伝言の碑」を建てた立命館大名誉教授の安斎育郎さん(80)。碑の文章を考え、書も書いた。

絵手紙の個展を開いたこともある多才ぶりは昨年、第 10 回国際平和博物館会議組織委員会の事務局長を務めた際にも発揮された。京都市で開催予定だったので、マンガ学部や京都国際マンガミュージアムのある京都精華大と一緒にマンガ展を企画した。 コロナの影響で博物館会議もマンガ展もオンライン開催となった。マンガ展のテーマをコロナウイルスとしたところ、世界から 1,000 点を超える作品が集まり、「マンガ・パンデミック Web展」は会期を延長するほどの人気だった。 プロの漫画家に交じって安斎さんの作品も展示された。そのうちの一点は、安斎さんに似た高齢者の命が若者の命とはかりに掛けられるという絵だ。



安斎さんが描いた漫画「いのちの天秤」

マジックは中学時代に始めた。東大では奇術愛好会会長に。一方、まやかしには厳しい。スプーン曲げを講演会で披露して「超能力ではなく、タネがある」と曲げるこつを教えることもある。 オウム真理教の空中浮遊も「あぐらジャンプ」だと批判した。するとオウム真理教の機関誌で「超能力批判の先鋒と名指しされた」。その後、数カ月にわたって無言電話が続くという不気味な体験もした。

立命館大で担当した科目は自然科学概論だった。そこでオカルト的ものを科学的にどう見るかを講義した。大教室に学生がいっぱいの人気講義になった。2004 年 12 月には NHK 教育テレビ「人間講座」で「だます心　だまされる心」の講師を務めた。科学的に正しくないことを、非科学的な理由で信じることの危険性をずっと訴えてきた。

＜ふくしまの10年・科学者　未来への伝言＞
(5)科学の信頼取り戻せ

東京新聞 2021 年 3 月 20 日 配信

何度も通っている福島市のさくら
みなみ保育園スタッフとの記念写
真＝安斎さん提供

東京電力福島第一原発事故から 10 年。放射線防護学が専門で、立命館大名誉教授の安斎育郎さん(80)は今でも福島県の人からこう尋ねられる。「ここに住んでいて大丈夫でしょうか」 心配する人がいれば、自宅に行って放射線量を計測する。低ければ「私なら住み続けます」と言う。東京などとほとんど変わらない場所でも不安を感じている人はいる。 福島市のさくら保育園の園庭での計測がきっかけで始まった福島プロジェクト。「事態を侮らず、過度に恐れず、理性的に向き合う」をモットーに福島で生活する人を支えてきた。「事態を侮らず、というのが難しいんですよ」と安斎さん。最近は「(住民が)放射線に慣れるのもちょっと恐ろしい」と感じる。

楢葉町の宝鏡寺に早川篤雄住職(81)と一緒に建てた「原発悔恨・伝言の碑」の碑文はこう結ばれている。

人々に伝えたい
感性を研ぎ澄まし
知恵をふりしぼり
力を結び合わせて
不条理に立ち向かう勇気を！
科学と命への限りない愛の力で！

活動は、原発事故で失った専門家への信頼を取り戻す試みのようにも見える。「アンケートによると、福島に帰りたいけど帰れない人が何万人もいるようだ。帰るときは放射能の見立てが必要になるかもしれない。だからまだ、活動は続けようと思っています」

11 日出版の「私の反原発人生と『福島プロジェクト』の足跡」(かもがわ出版)には、心配な人が相談できるよう連絡先も書いてある。ゴールはまだ遠い。(記事は初代福島特別支局長が担当しました)

◆「ふくしまの10年」は今回で終わります。読者の皆さんの声を励みに続けることができました。ご愛読ありがとうございました。